

土器づくり民族誌から見た土器型式の社会的背景

中 門 亮 太

要旨 本稿では、バブアニューギニア・ミルンバイ州の土器づくり民族誌を、考古学的民族誌の視点から捉えることで、本地域にどのような土器型式が認められるかを確認した。その上で、過去の民族誌記録なども参照し、土器型式の成立や分布、流通に関わる社会的な要因を考察した。

結果として、考古学的に捉えうる土器型式は、クランなどの親族組織を基盤とした社会集団の広がりとして捉えられる可能性が高く、その中には各クランを単位とする細別型式があると考えられる。交易による土器の流通は、より広範な土器型式の分布圏を生み出す契機となるが、その流れは地域によって強弱があり、一方的に土器を輸出し土器づくりに関する情報も発信する地域、在地の土器を持ちながら他地域からも特定の器種などを受け入れる地域、土器づくりを行わず土器のすべてを受け入れる地域など、様々なあり方が見られる。一方で、本地域に見られる儀礼食調理では、特定の器種が用いられる。そのため、儀礼食調理の広がり、親族組織などによる土器型式の広がりとは別次元で土器の分布を引き起こす要因として捉えられる。

土器づくりを行いつつ他地域からも土器を受け入れる地域では、模倣土器が生み出され在地型式の中に組み込まれる場合もあり、土器の変化という点でも、交易による土器の流通は大きな影響を持つと考えられる。また、土器の製作工程の違いは、単なる技術の差異というだけではなく、土器づくりの生産体制とも深い関わりを持つ可能性が捉えられた。土器づくりが社会の中で重要な産業として位置づけられる地域では、土器は個人の作品ではなくコミュニティ全体の産物として認識される。これは、製作過程で乾燥期間を挟み、一つの土器に複数の製作者が関わることで出来る環境にあるためであるが、輸出用に大量に土器を必要とする地域では、効果的な戦略とも捉えられる。

はじめに

縄文土器は、縄文時代全体を通じて普遍的に出土し、且つ時期・地域によって様々な型式変化を遂げる。そのため、縄文土器研究は、無文字社会における時間の物差しとしての編年研究に重点が置かれてきた。一方で、土器は「社会の変化や集団組織のあり方や交流をも語ることでできる遺物」としても捉えられ(西田 2008: 3)、土器からその背景にある社会を読み取る研究を進めることは、縄文社会研究において非常に重要である。

本稿では、筆者が継続してフィールドワークを行ってきたバブアニューギニア・ミルンバイ州(Papua New Guinea, Milne Bay Province)の土器づくり民族誌を、「考古学的民族誌」(後藤 2007: 3)の視点から捉えることで、土器が実際に機能している社会で、どのような土器型式が捉えられるかを探る。その上で、土器型式の成立や地域性に関わる要因を考察し、土器型式の社会的背景に迫るためのモデルケースの作成を目指す。

1. ミルンバイ州マッサムにおける土器づくり民族誌

1-1. マッサムの概要

ミルンバイ州マッサム（Massim）は、バブアニューギニアの南東島嶼部を指す言葉であり⁽¹⁾、ニューギニア本島の東端部とその周辺に広がる島々からなる（図1）。

気候は熱帯気候であり、概ね5月から11月が雨期、12月から4月が乾期である。ニューギニアには800を超える言語が存在するが、ミルンバイ州政府によるとマッサムには2014年現在50以上の言語が存在する。生業は焼畑と漁労が中心で、畑ではヤムイモ、タロイモ、バナナを始め、多彩な根菜類や果物が栽培されている。ヤムイモは主食としてより、儀礼的な側面が強く、トロブリアン諸島（Trobriand Islands）ではヤムイモの収穫祭が盛大に行われる。家畜は、儀礼のためにブタを飼育しているほか、鶏がいる。

古くより人類学のフィールドとして民族誌調査が行われてきた地域であり、マリノフスキがまとめた本地域における「クラ（Kula）」と呼ばれる儀礼的交換の研究は夙に有名である（Malinowski 1984 [1922]）。

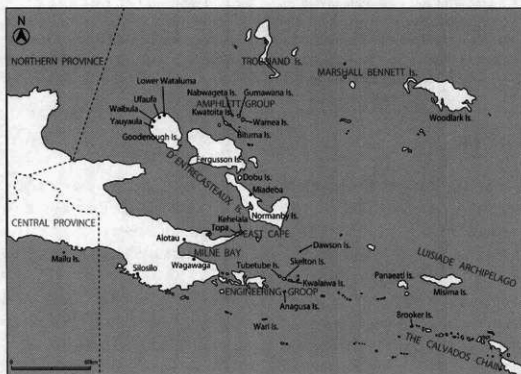


図1 マッサム周辺図

1-2. マッサムにおける土器づくり民族誌研究

マッサムにおける民族誌記録を掃くと、マリノフスキによって先鞭を付けられた交易体系に関する研究が主体を占めるが、土器に関する記録も散見される。古いものでは、19世紀後半にハッドンがワリ島 (Wari Island) の土器づくりを記録している (Haddon 1894: 222-224)。ミルンベイ州で広くフィールドワークを行ったセリグマンは、マッサム北部のアムフレット諸島 (Amphlett Islands) で製作される土器を、「本地域 (ミルンベイ州: 筆者註) において最も頑丈で美しい土器」と評している (Seligmann 1910: 531)。マリノフスキも、アムフレット諸島の土器をサイズや薄さ、耐久性、仕上がりなどの点から、「英領ニューギニアにおける土器の中で最も優れている」と記録している (Malinowski 1984 [1922]: 283)。また、土器はクラに伴う交易や日常的な交易において、交易品として各地域へ流通している (Malinowski 1984 [1922], 後藤 2002, 中門 2012a)。

土器づくりに重点を置いてフィールドワークを行った研究はあまり多くないが、ラウアーやメイとタクソン、マキンタイアらの研究がある (Lauer 1974ほか, May & Tuckson 1982, Macintyre 1982)。特にメイとタクソンは、ニューギニアの土器を美術工芸的な視点から記録しており、ミルンベイ州においても多くの地域で土器づくりを記録している (May & Tuckson 1982)。マッサムにおける土器は、いずれも丸底の鉢形を基調としており、女性が土器づくりを行うことが共通してみられる。考古学的な研究成果から、この器形的特徴は、少なくともA.D. 1500年頃まで遡ることが指摘されている (Negishi 2008)。

2. マッサムにおける土器づくり

上述のように、マッサムでは土器づくりを行う地域が多数記録されている。

以下では、筆者らが行った民族誌調査の成果と、先行研究をもとに、マッサムにおける土器づくりのあり方を地域ごとに見ていく。

2-1. ニューギニア本島イーストケープ

(1) イーストケープの概要

イーストケープ (East cape) は、その名の通りニューギニア本島の最東端の岬を指す。ミルンベイ州は、キリスト教の教区による区分が行われており、ケヘララ (Kehelala) が最東端に位置する。州都アロタウ (Alotau) からケヘララまでは計32の教区が存在する (図2)。厳密にどの範囲までを「イーストケープ」と呼ぶかは不明であるが、土器づくりが行われている地域としては本島最東端のケヘララ、トバ (Topa) がメイとタクソンにより記録されている (May & Tuckson 1982: 102)。筆者らによる調査では、トバの西に位置するイブライ (Ibulai) にも土器製作者がおり、土器づくりを行っているという。

イーストケープにおける土器の特別な用い方として、頭骨の二次葬がある。現在はキリスト教

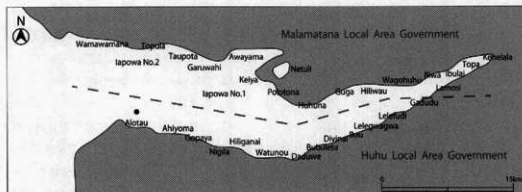


図2 教区の分布

的な墓が一般的になっているが、かつては死者を一度首から下まで埋め、頭に土器を被せる形で埋葬し、暫くして骨のみになると、頭骨だけを洞窟へ運んで二次葬を行っていた⁽²⁾。洞窟には、土器が副葬されることがあり、洞窟内で採集した土器に関する聞き取りから、150年ほど前まではこのような埋葬が行われていたようである。

以下では、筆者らが実見したケヘララ、トバにおける土器づくりを紹介する。

(2) イーストケープの土器 (図3)

イーストケープの土器は、胴部と口縁部の境で屈曲部を有する器形と、屈曲部を有さず丸みを帯びて立ち上がる器形の2種類が存在する。前者はさらに、口縁部が直立し櫛歯状工具による文様を施す「ギルマ (giluma) (図3-1)」、口縁部の輪積み痕を残す「ピドラ (pidola) (図3-2)」、口縁部が内湾する「グマシラ (gumasila) (図3-4)」等の器種が存在する。このうちピドラは、100年ほど前の墓にその分布が確認され、先述の土器棺葬用の器種であったと考えられる (高橋ほか 2008)。また、グマシラは後述するアムフレット諸島グマワナ島 (Gumawana Island) の模倣器種である可能性が指摘されている (根岸 2010)。後者は「ハバヤ (habaya) (図3-3)」と呼ばれるもので、厚手であることが特徴で、口唇内面に稜を作出するものや、耳状や疣状の突起を貼付ける特徴がある。

(3) イーストケープの土器づくり (図4)

イーストケープにおける土器づくりは、まず採取してきた粘土を木槌で叩いて均質にし、小石等の不純物を取り除くことから始まる (図4-1)。小石等を取り除く行為は現地語で「ピトリ (pitoli)」と呼ばれ、土器製作技術の習得にあたっては、この作業を手伝うことから習い始めることが多い。素地として用意された粘土は、適度な大きさに取り、板の上で転がすことで粘土紐を作出する (図4-2)。粘土紐を巻き上げ、底部を作出し (図4-3)、その後も粘土紐を継ぎ足して土器の成形を行っていく。ある程度まで成形を行った後は、成形皿の上で粘土紐を内傾接合に

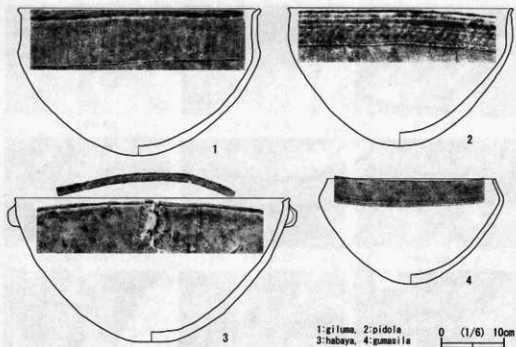


図3 イーストケープの土器

よって輪積みしていく(図4-4)。途中、粘土紐を数段積み上げる毎に、内面および外面をユビナデし、輪積み痕を消していく(図4-5)。底部の成形が終わると、輪積みによって口縁部を立ち上げ(図4-6)、最後はやや細めの粘土紐を口唇部に巻き付ける(図4-7)。成形が終わったら、貝殻によるケズリ調整、ナデによる整形を行う(図4-8)。その後、櫛歯状工具により文様を描き(図4-9)、ココナツの葉で覆って風通しの良い日陰で数日乾燥させる。

ハバヤは、屈曲部を有さずに丸みを帯びて立ち上がる器形で、耳状や疣状の突起が付される特徴がある。成形・整形技法は、ギルマと同じであるが、屈曲部を有さず、口縁部を垂直に立ち上げる必要がないことから、成形が比較的容易であることが窺える⁽³⁾。ギルマが成形の最終段階で口唇に細い粘土紐を外側から巻き付けて外反する口唇部を作出するのに対し、ハバヤでは細い粘土紐を内側に巻き付けて口唇内面に肥厚する稜を作出する例が見られる。成形が完了すると、突起を貼付ける箇所を水で濡らして、適量の粘土を疣状あるいは耳状に貼付け(図4-10)、ナデによって押さえつける。文様は櫛歯状工具によって突起間や口唇内面に鋸歯状や蛇行する線を描く。施文後は、ギルマと同様風通しの良い日陰で数日乾燥を行う。

ギルマ・ハバヤともに、乾燥がある程度進んだら、土器を逆位に設置し、底部外面を貝殻で削って輪積み痕を消し(図4-11)、ナデによって器面をきれいにする。さらに一週間ほど乾燥をさせたら、集落の背後に広がる不特定の場所で、野焼きによる焼成を行う(図4-12)。

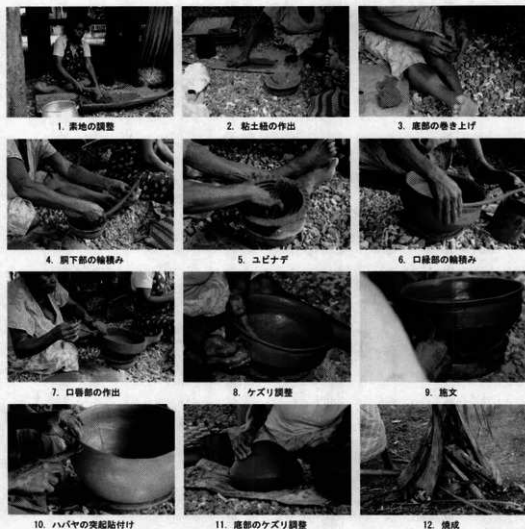


図4 イーストケープの土器づくり

2-2. フリ島

(1) フリ島の概要

フリ島は、マッシン南部に位置する東西約4km、南北約1kmの小島である。島南西部の砂浜沿いに26の集落が集中して営まれており、居住域以外は平地から斜面の草地まで至る所に焼畑が営まれる（高橋ほか 2011）。生業は焼畑と漁労が中心であるが、土壌がやせているため慢性的な資源不足があり、他地域との交易によって食料など様々なものを入手している。フリ島からの輸出品は専ら土器であり、「No clay pot, no food」と言われるほど、土器は交易品として重要な地位を占めている。土器づくりは各世帯における収入源のみならず、親族ひいてはフリ島というコミュニティ全体において重要な産業となっている⁽⁴⁾。

(2) ワリ島の土器 (図5)

ワリ島には、鉢形の煮炊用調理具である「グレワ (gulewa) (図5-1・2)」、「マIMUMア (mimuma) (図5-3)」のほか、小麦粉を練ったものを焼く際にフライパンのように用いられる浅鉢形の「カワエガ (kawaega) (図5-5)」、花瓶 (flower pot) (図5-4) が存在する。「グレワ」とは、現地の言葉で粘土をさす言葉でもあり、煮炊調理用の土器については、大きさによる呼称の違いがあるのみで、用途に起因する分類は存在しない。マIMUMアは、イーストケープにおけるピドラよりも、さらに明瞭な輪積み痕を残しており、櫛歯状工具による文様は描かれない。伝統的な器種であるというが、近年は廃れてきているようである (高橋ほか 2015)。カワエガ、花瓶は、1980年代から作られるようになった新しい器種であり、特に花瓶はインテリア用とも言うべき土器で、ナイフなどを用いて透かしが施される。以下では、筆者らが土器づくりを実見した、グレワの製作について取りあげる。

(3) ワリ島の土器づくり (図6)

ワリ島における土器づくりの特徴の一つとして、非常にきめ細かい素地づくりを行うことがあげられる。採取してきた粘土はまず天日にさらされ、石皿と磨石を用いて叩きつぶしながら小石などの不純物を取り除く (図6-1)。その後、水を適宜含ませながら粘土をこねて素地を均質にしてい (図6-2)。粘土の調整は、遅くとも土器づくりを行う前日までは済ませておくように、調整済みの粘土がビニールなどにくるまれて、家の床下に安置されている様子をいくつかの世帯で確認することができた。

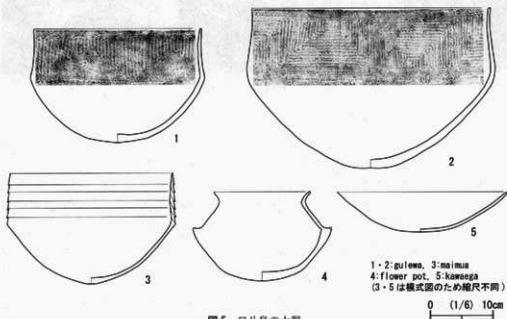


図5 ワリ島の土器



図6 ワリ島の土器づくり

土器づくりは、まず手捻りによって粘土紐を作出し（図6-3）、巻き上げによって底部を作出する（図6-4）。底部を作出すると、成形皿の上に置き、粘土紐の巻き上げによって成形を行っていく（図6-5）。屈曲部までの成形は内傾接合で行われ、適宜ナデによって内面の輪積み痕を消していく（図6-6）。屈曲部までの成形が終わると、一度乾燥を行う。ある程度乾燥が進んだら、外傾接合による輪積みで屈曲部から口縁部の成形を行っていく（図6-7）。口縁部までの成形が終了したら、ユビナデによって輪積み痕を消し（図6-8）、再び乾燥が挟まれる⁽³⁾。乾燥がある程度進んだら、貝殻によるケズリを行う（図6-9・10）。ケズリは内外面両方から徹底的に行われ、器壁を薄く仕上げていく。ケズリが終わったら、水を多用してナデを施し、器面を磨き

上げ、貝殻によって口唇を平滑にする(図6-11)。その後、櫛状工具によって文様を描いて(図6-12)完成となる。完成後、風通しの良い日陰で数日乾燥を行い、土器を逆位に設置して底部外面の輪積み痕を消す。さらに乾燥を行った後、野焼きによる焼成が行われる⁽⁶⁾。

このように、ワリ島における土器づくりは、イーストケープのように成形から施文までが一貫して行われるのではなく、数回の作り分けによって行われていることが特徴としてあげられる。

2-3. アムフレット諸島

アムフレット諸島における土器づくり民族誌は、ラウアーや、メイとタクソンによる詳細な記録があり(Lauer 1974, May & Tuckson 1982)、ここでは彼らの記録をもとに紹介する。

(1) アムフレット諸島の概要

アムフレット諸島は、マッシム北部に位置し、火山性の岩礁に由来する28の島々からなる。グマワナ島をはじめとする4つの島に約230人が居住しているが、無人の島々でも焼畑が行われている(Lauer 1970)。焼畑ではバナナ、ヤムイモ、サツマイモ、タロイモ、サトウキビなど多様な食物が栽培されている。しかし、島の多くは急峻な岩山で焼畑を行える場所が限られるほか、表土が薄く地下茎が大きく育たないため、収穫量は十分なものではない。また、家屋の屋根や壁の材料となるサゴヤシ、カヌーの材料となる大木も無い(福本 1994)。そのため、食料や日常生活必需品を入手するため、近隣地域との交易が重要な地位を占める。アムフレット諸島からの輸出品は土器が中心となっている。

(2) アムフレット諸島の土器(図7)

アムフレット諸島の土器は、大きさや口縁部形態、機能、装飾などによって8種類の器種に分類される。「ノファエワ(nofaewa)(図7-2)」と「ヴァエガトイナ(vaegatoina)(図7-7)」は、口縁部の屈曲が強く、胴部上半と明確に分けられ、装飾は口縁部のみに施される。「カオカオ(kaokao)⁽⁷⁾」と「ノクノ(nokuno)(図7-1)」は、胴部上半が丸みを帯びる器形で、口縁部が内湾する。対称的な沈線や点刻によって幾何学的な文様が描かれ、粘土紐が「U」字状に数単位貼付けられる。「ノシボマ(nosipoma)(図7-3)」,「アイデデヤ(aidedeya)(図7-5)」,「アリマヌ(alimanu)(図7-4)」もまた、胴部上半が丸みを帯びる器形であり、口縁部突起の無いものがノシボマ、2単位配されるものがアイデデヤ、4単位配されるものがアリマヌである。また、比較的新しい器種として、2つの食材を同時に調理するために中央で分けられた「ワボダパイナ(wabodapaina)(図7-6)」がある。

日常調理に用いられるものはヴァエガトイナとカオカオのみであり、他はすべて祭宴時の調理用土器である⁽⁸⁾。ノクノは「モナ(mona)」と呼ばれる特別な儀礼食調理用の土器、ノファエワは儀礼時にヤムイモとタロイモの調理に用いられる土器、ノシボマは呪術と関係のある土器である。

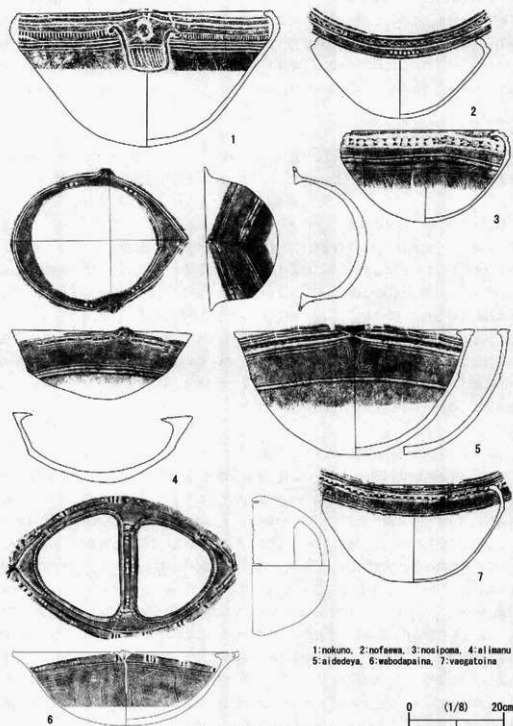


図7 アムフレット諸島の土器

(3) アムフレット諸島の土器づくり (図8)

アムフレット諸島民は、土器づくりのための粘土をファーガソン島 (Fergusson Island) の北西部にあるヤヤヴァナ (Yayavana) で採掘していた。しかし1967年以降、粘土採掘坑は地域政府の管轄下におかれ、アムフレット諸島民はバスケット一つにつき6オーストラリアドルを支払わなければならなくなった。この値段は法外なものであり、アムフレット諸島民は新たな粘土採掘坑を探し、現在は諸島内のグドゥライ (Gudulai) 島、ビトゥマ (Bituma) 島、そしてファーガソン島のワダレイ (Wadalei) から採取してくる。グマワナ島にも粘土採掘坑があったが、1969年の時点では既に使用されなくなっていた。現在、アムフレット諸島民は複数の粘土採掘坑から取ってきた粘土を混ぜ合わせて土器づくりを行っているが、これらの粘土を見つけるまでには様々な試行錯誤が行われた⁽⁹⁾。粘土採掘は男性が行うが、特別な儀礼などは無い。採取してきた粘土は、土器づくりを行うまで床下に安置される。

粘土は乾燥させた後に、カヌーの廃材である楯状の板の上で水を加えながら捏ね、小石やゴミなどの不純物を取り除きながら均質な素地を作っていく。調整した素地は円筒形にまとめ、二つの塊に分けられる。其々の塊は、板の上で引き延ばされ、長い粘土板を成形する。土器は、この2枚の粘土板を貼り合わせ引き延ばすことにより、口縁部から底部へと向かって成形する (図8-1)。左手を土器の内面に沿え、右手のユビで粘土を掻き上げながら引き延ばしていく (図8-2)。粘土板は平らな板の上に置かれているため、製作者自身が土器の周りを回りながら成形を行う。適宜粘土をちぎったり足したりしながら、ドーム状に成形をしていき、最終的には小さな穴が残る。この穴から左腕を差し込み、右手に持った叩き板を水に濡らしながら、土器の外面を叩いて形を整える (図8-3)。最後に残った穴の周りの粘土をかき集めて穴を埋めたら、再び叩



1. 粘土板の貼り合わせ



2. 掻き上げによる成形



3. 叩き板を使い底部を閉じる



4. 叩き板による整形



5. 口縁部の整形



6. 小石によるミガキ

図8 アムフレット諸島の土器づくり

き板で形を整える（図8-4）。外面の整形が完了したら、叩き板の刃部で口縁部の不揃いな部分を整え、口縁部を葉っぱで覆って日陰でしばし乾燥を施す。

十分に乾燥したら、土器の底面に葉っぱをあてがい、植物性の台座の上に正位に据えて、成形時に置いていた板を取り外す。木製のナイフ状工具で口唇を平滑にしたら、水に濡らした叩き板で口縁部を叩いて内湾させていく（図8-5）。文様は種による横位沈線、傾きを交互に違った斜沈線、点刻による横線や波線、粘土紐の貼付け、刺突などによって、複雑な文様が描かれる。施文が終わると、左手で土器の外面を支え、内面を貝殻で削っていく。ケズリ調整が終わったら、大きい種や石で土器の外面を磨き（図8-6）、内面を小さい板や貝殻できれいにナデて、2～3日乾燥を施す。

焼成はココナツの殻や葉、木材を燃料にして、野焼きで行われる。土器は、木材を積み重ねた上に逆位に設置され、大きい土器の場合は一つずつ、小さい土器の場合は複数まとめて焼成を行う。40分ほどで燃料が燃え尽きると、棒で土器を転がし出して、土器が熱いうちにココナツミルクや樹液をかけて完成となる。

2-4. グッドイナフ島

グッドイナフ島（Goodenough Island）における土器づくり民族誌は、ラウアーによる詳細な記録があり（Lauer 1974）、ここではその記録を中心に紹介する。

（1）グッドイナフ島の概要

グッドイナフ島は、マッシュム北西部に位置する。デントロカストー諸島（D'Entrecasteaux Islands）を構成する火山島であり、最大標高は2500mに及ぶ。海岸沿いには平坦な丘が続き、23の行政区が存在する。かつては高地にも居住するものがいたが、植民地政府の指示もあり、現在は低地に集落が営まれている。行政区は戦争や婚姻の単位ともなる社会組織である。高地では、集落に石の祭壇を作るなど低地とは文化的に異なっていたが、社会制度は同じであった。生業は焼畑と漁労が主である。

（2）グッドイナフ島の土器（図9）

グッドイナフ島では、島の北西部に位置する低地ワタルマ（Lower Wataluma）、ウファウファ（Ufaufa）、ワイブラ（Waibula）、ヤウヤウラ（Yauyaula）の4地域12集落で土器づくりが記録されている。グッドイナフ島は、クラの輪には組み込まれておらず、土器製作は主に自家消費のために行われる。周辺地域と



図9 グッドイナフ島の土器

の日常的な交易は存在しているが、グッドイナフ島産の土器の交易は島内に限られる。そのため、土器づくりは専ら自分たちの必要に応じて行われるが、他人から依頼された際につくこともある。一方で、アムフレット諸島から土器を輸入しており、祭宴時の土器はアムフレット諸島産のものが用いられる。

土器は現地語で「タゲ (tagé)」と呼ばれる。器種は丸底の鉢形を基調とし、明確な屈曲部を有する。器形は円形のもの、卵形のもの、内部で二つに分割されるものの3種類があるが、其々に特別な名前は無い。また、土器のサイズはアムフレット諸島におけるヴァエガトイナの範疇に相当するが、総じてやや大きいという。

(3) グッドイナフ島の土器づくり (図10)

グッドイナフ島では、土器づくりを行う4地域々々が独自の粘土採掘坑を所有している。かつては粘土採掘にも儀礼があったようであり、現在でもヤウヤウラの人々は古い慣習に則って、採掘坑へ到着したら右頬と左腕に粘土を塗り付ける。採掘した粘土は、その場で根っこやゴミを取り除き、乾燥を防ぐため葉っぱを被せて集落へ持ち帰る。製作者は、必要に応じて粘土を取りに行き、大量に家に保管しておくことは少ないようである。

採取してきた粘土に水を加え、塊を手で捏ねながら不純物を取り除き、径3cm、長さ8cmくらいの短い粘土紐を作出する。この粘土紐を、板やサゴヤシの葉状体の上で転がして、径1~1.5cm、長さ30~40cmにのばしていく (図10-1)。グッドイナフ島の土器づくりは、この粘土紐の輪積みによって行われる。しかし、イーストケーブやワリ島とは異なり、木の板の上で口縁部から底部へ向けて成形される (図10-2)。輪積みは時計回りに右手で粘土紐を押さえながら行われる。厳密に一段毎に区切られ、7本ほど積み上げたら、左手を内面に沿え、右手で下から上へ向かってユビナデを施し、輪積み痕を消す (図10-3)。この輪積みとユビナデを繰り返し (図10-4)、徐々に器形をすばめていく (図10-5)。最終的には小さな穴に左手の小指を差し込みつつ、周囲の粘土をかき集めて底部を閉じる (図10-6)。成形が終わると、手の平全体でナデで外面を滑らかにし、早く仕上げたい場合は日向で、後日土器づくりを続ける場合は葉っぱや濡らした布で覆って日陰で乾燥を行う。この乾燥期間中に、適宜叩き板で叩いて器形を整える。

十分な乾燥が得られたら、再度叩き板で器形を整え、種で外面を磨く。その後、土器を成形時に置いていた板から取り外し、植物性の台座の上に正位に据える。貝殻の刃部やナイフで口唇を削り平滑にし、左手を内面に沿え、水で濡らした叩き板で外面を叩くことにより口縁部を内傾させる (図10-7)。器形が整ったら、再度口唇を削って平滑にし (図10-8)、文様を施文するために種で器壁をならしていく。文様は通常、口縁部から胴部上半に施される。口縁部には沈線や点刻により文様が描かれ (図10-9)、胴部上半は主に横位沈線や斜位の短沈線が描かれる。施文が終わると、貝殻や鉄製のスプーンで内面のケズリ調整を行い、器厚が整ったら種で内面を磨いて完成である。



図 10 グッドイナフ島の土器づくり

その後、しばし乾燥期間を置き、十分な乾燥が得られたら野焼きによる焼成を行う。かつては、土器に関する伝説に基づき、特別な木が燃料として用いられていたようであるが、現在はココヤシとサゴヤシの葉が燃料として用いられる。一度に焼成を行う数は、特に決まっていない。まず、ココヤシの枝や葉を組んで土台を作り、その上に土器を逆位に設置し、サゴヤシの葉で覆う。土台の下から火を入れると、5分足らずのうちに炎の温度は600度を超え、15分～25分ほどで燃料は燃え尽きる。焼成が終わったら、長い棒を用いて土器を取り出し、徐々に冷まして完成となる。

3. マッサムにおける土器型式

これまで見てきたマッサムにおける各地域の土器は、器形的特徴や施文技法などから、土器型式として比定しうる、いくつかの地域的なまとまりを捉えることができる（図11）。以下では、各型式の分布域や器形的特徴を述べる。なお、ここで言う分布域とは、その土器型式が製作されているもしくは主体的に分布する地域を指し、後述する流通範囲とは若干のずれがある。

3-1. イーストケープ・スタイル

(1) 分布域

イーストケープ・スタイルは、ニューギニア本島周辺から、ノルマンビー島 (Normanby Island) にかけて分布する。ニューギニア本島ではマラマタナ地域政府 (Malamatana Local Area Government) およびフフ地域政府 (Huhu Local Area Government) 双方に広く分布している。メイとタクソンによる記録でも、イーストケープとよく似た土器が、タウポタ (Taupota) あたりまで分布する可能性が指摘されているほか、ミルン湾を挟んだ反対の半島に位置するワガワガ周辺でも見られる (May, P. & M. Tuckson 1982 : 81-82)。

ノルマンビー島はイーストケープと古くから地縁的な繋がりが強く、かつてはパートナー間で食料と土器などの交換 (ウィキドコ : wikidoko) を行っていたというため、イーストケープ産の土器が分布する地域として捉えられる。ノルマンビー島では、中央北岸に位置するミアデバ (Miadeba) 村で、メイとタクソンのほか、ラウアーによって土器づくりが記録されている (May, P. & M. Tuckson 1982, Lauer 1973)。ミアデバ村の土器づくりは、粘土紐の巻き上げ、輪積みによって行われる。器種については不明な部分が多いが、放射状に立ち上がり、2個一対の突起が配された、イーストケープにおけるハバヤとよく似た器種が記録されている (図12)。しかし、2008年時点でミアデバ村では既に土器づくりが消失しており、土器自体もワリ島およびイーストケープの土器がわずかに見られる程度であったという⁽¹⁰⁾。

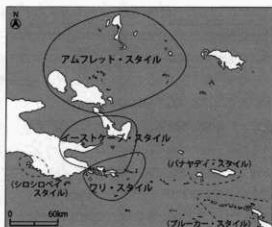


図11 マッシュムにおける土器型式



図12 ミアデバ村の土器

(2) 器形的特徴と器種組成

イーストケープ・スタイルは、4つの器種を基調とし、その他に子供用の土器や他地域の模倣土器がある (高橋ほか 2009)。器種によって日常調理、儀礼食調理、土器棺用等、用途の別がある。ギルマに代表される屈曲部を有するものは、屈曲部から口縁部にかけて、櫛歯状工具による文様が描かれるが、器種によってやや違いがある。ギルマの文様には、矩形の囲いを施すもの、鋸歯状や菱形、三角形、亀甲形など直線を主体としたもの、波線や「U」字状のものなどが見られる。グマシラは鋸歯状もしくは三角形を主体とした文様が多い。ピドラは、粘土紐の輪積み痕を残しているため、櫛歯状工具で1〜2単位の蛇行線をめぐらせるだけの場合が多い。屈曲部に

は、貝殻を用いた刻目が区画としてめぐることが多いが、稀に棒状工具による沈線で区画するものが見られる。ギルマの口唇部は、粘土紐を外側に巻付けることによって作出されるが、明確に外反するものと直立気味に立ち上がるものがある。

ハバヤは儀礼食調理に用いられる土器で、底部から緩やかに立ち上がる器形と、口縁部付近でやや直立気味に立ち上がる器形があるが、ギルマなどのように明確な屈曲部は持たない。ハバヤは耳状や疣状の粘土貼付けが付される場合が多く、貼付け間を櫛歯状工具による蛇行線等でつなぐものが一般的である。口唇部は、粘土紐を内面に巻き付けることで作出され、断面三角形の稜を持つものもある。明確な稜を持つものは、口唇内面に櫛歯状工具による鋸歯状や蛇行した線をめぐらせるものが多い。ミアデバ村で記録された土器は、このハバヤとよく似た器形であり、内外面に貝殻による2条の蛇行沈線をめぐらせ、2単位の突起を付して装飾とするとされる（Lauer 1973: 72）。

3-2. ワリ・スタイル

(1) 分布域

ワリ・スタイルは、ワリ島をはじめとするエンジニアリング諸島一帯に分布する。ワリ島以外の土器製作地としては、トゥベトゥベ島（Tubetube Island）、コライワ島（Kwaraiwa Island）、アナグサ島（Anagusa Island）、スケルトン島（Skelton Island）、ドーソン島（Dawson Island）などにおける民族誌記録が見られる（May & Tuckson 1982: 81-90）。トゥベトゥベ島の土器づくりは、粘土紐の作出方法や文様の点でワリ島とよく似ている。特に文様は、構成する線の描き方や組み合わせによって固有の名称を持っており（Macintyre 1982: 41-43）、ワリ島における伝統的な文様名との類似も見られる（高橋ほか 2015）。



図13 トゥベトゥベ島の土器

一方で、トゥベトゥベ島の土器は口唇に粘土紐を巻き付けることが特徴とされており（May & Tuckson 1982: 83）、その器形的特徴は一見するとイーストケープ・スタイルに近いように見える（図13）。また、トゥベトゥベ島の粘土は質が悪く、ワリ島のものより厚手で光沢が無いと記録されている（Macintyre 1983: 370）。そのため、トゥベトゥベ島の土器は、製作技法や文様はワリ島と近い一方で、粘土の質が良くないこともあり、ワリ島ほど薄手の土器はつくれず、完成品としてはイーストケープ・スタイルに近い様相を示すと考えられる。筆者らはトゥベトゥベ島でのフィールドワークを行っておらず、詳細な情報を持たないため、ここではトゥベトゥベ島は両地域の緩衝地帯として捉えておく。

(2) 器形的特徴と器種組成

ワリ・スタイルの土器は、煮炊き調理用の鉢を基調とする。大きさによって呼称の別があるほ

か、ワリ島にはマイムアという輪積み痕を残すものが見られる。また、ワリ島にはフライパン調理用の浅鉢であるカワエガ、インテリア用のフラワーポットがあるが、これらは1980年代以降から製作され始めたものであるため、ここでは除外する。鉢は、屈曲部を有し口縁部が直立気味のもの一般的であるが、緩やかなカーブを描きながら内湾するものも見られる。文様は櫛歯状工具によって描かれるが、イーストケープ・スタイルと比べ、櫛歯が鋭く歯の単位を明確に把握できる。屈曲部には、櫛歯状工具の反対側で列点を巡らせて区画とする。多くの場合、口縁部と屈曲部直上に蛇行沈線が巡り、その間に主体となる文様が描かれる。文様は、矩形の囲いを重ねたものを始め、三角形や菱形を組み合わせた幾何学的な文様、波線や「U」字状の文様などが見られる。中には伝統的な文様として固有の名前を持つものもあり（高橋ほか 2015）、文様が単なる装飾ではなく明確に意識されていたことが窺える。

また、イーストケープ・スタイルと比べ、文様帯の幅が広く器壁が薄いことが特徴である（中門 2012b）。イーストケープ・スタイルの場合、土器が大型化する際は、屈曲部までの胴部が大型化し、文様が描かれる口縁部はあまり大きくならない。一方で、ワリ・スタイルの土器は、相似的に大型化し、一定の割合で器壁に対し文様帯を確保していることが窺える（高橋ほか 2010、中門 2012b）。これは、成形・整形途中で乾燥を挟む製作工程に起因すると考えられる。一度目の乾燥は、底部から屈曲部までの、土器の土台部分を強固にすることにより、口縁部を立ち上げる過程で器形が崩れるのを防いでいると考えられる。二度目の乾燥は、器全体を強固にすることで、貝殻によるケズリ調整を徹底的に施すことができ、器壁を薄手に仕上げるのが可能になると考えられる。筆者の簡単な計測では、ケズリ調整後の器厚は、成形終了時の器厚から5mmほど薄くなっている。

3-3. アムフレット・スタイル

(1) 分布域

アムフレット・スタイルは、アムフレット諸島、グッドイナフ島、トロブリアンド諸島、ファークソン島、ドブ島（Dobu Island）などマッサム北部を中心に分布する。

アムフレット・スタイルは、アムフレット諸島で製作されるが、グッドイナフ島民は、日常調理の為に在地の土器を製作している。グッドイナフ島の土器はアムフレット諸島の土器と比べ、明瞭な屈曲部を持ち、文様などの装飾も簡素であり、別型式として括るかは判断の分かれる所である。しかし、グッドイナフ島の土器は、基本的にアムフレット・スタイルの分布域の中に収まる範囲でしか分布しない。グッドイナフ島におけるアムフレット諸島産の土器と在地土器の比率は不明であるが、考古学的民族誌の視点で両地域の土器を見た場合、グッドイナフ島の土器は、別型式と言うより一型式内で特定地域に分布する器種として捉えられるであろう。そのため、ここではグッドイナフ島の土器はアムフレット・スタイルの器種の一つとして扱う。

（2）器形的特徴と器種組成

アムフレット諸島の土器は、大きさや器形、機能、装飾などによって8つの器種に分かれる。詳細は前節で述べたが、いずれも口縁部が強く内傾し、口唇が肥厚もしくは鐮状に内側へ張り出すのが特徴的である。大型のノファエワとノクノは祭宴時の調理用土器であり、中でもノクノは、ひときわ大きく装飾的なもので、儀礼食モナの調理のための土器であるとされる(Malinowski 1984 [1922]: 286)。文様は、棒状工具や種による沈線、巻貝による刺突、粘土の貼り付けなどによって描かれるが、器種によって装飾に違いがある。ノクノは対称的な沈線や点刻による文様が描かれ、粘土紐が「U」字形に貼り付けられるのが最大の特徴である。

口縁部が内傾する器形的特徴は、叩き板を用いた整形によって生み出される。また、アムフレット諸島産のものは、粘土板を貼り合わせることで成形が行われるため、イーストケープ・スタイルやワリ・スタイルと比べ、重厚な印象がある。

グッドイナフ島のもは、明瞭な屈曲部を持ち、文様は屈曲部より上の口縁部に集約される。文様は棒状工具や貝殻による沈線によって描かれるものが主体を占め、貼り付けを持つものは無いようである。

3-4. 小結

ここでは、筆者が調査を行ったイーストケープ、ワリ島を始め、詳細な土器づくり民族誌が記録されている地域を中心に、各地域に土器型式を設定した。各型式の分布範囲は図11のように示される。

イーストケープ・スタイルとワリ・スタイルは、屈曲部を有する器形や櫛歯状工具による文様を描く点など、大きくは「櫛書文伝統」(Negishi 2008) に括られる。成形は共に輪積みで行われるが、製作工程で乾燥を挟むか否かによって、文様帯の広さや器壁の厚さに違いが生まれる。また、後述するように土器づくりがコミュニティに占める重要度や、儀礼食調理の有無などによって器種組成の違いが見られ、結果として両者の土器には別型式として認識しうる差異が生じている。一方で、アムフレット・スタイルでは、粘土板を貼り合わせる成形技法と輪積みによる成形技法が見られるが、口縁部から底部へ向かう成形、および叩き板による整形によ

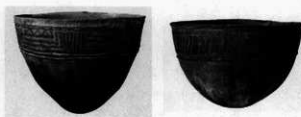


図14 シロシロベいの土器

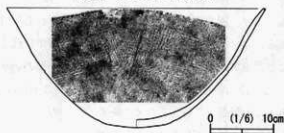


図15 パナヤティ島の土器

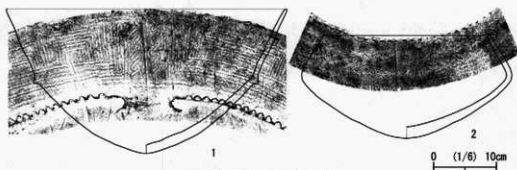


図16 ブルーカー島の土器

	成形法	成形方向	器形	乾燥	口縁部形態	施文	用途	模範土器	製作目的
EC	輪積み	底部→口縁部	貝殻ケズリナデ	施文後	直立外反	柳歯による沈線(単位不明)	日常調理 儀礼食調理 土器	あり	自家消費 交換
Wari	輪積み	底部→口縁部	貝殻ケズリナデ	成形途中 成形後 施文後	直立外反 内湾	柳歯による沈線(単位不明)	日常調理	なし	自家消費 交換 輸出
Amhrett	粘土板貼合せ	口縁部→底部	貝殻ケズリ 叩き板 ミガキ	成形後 施文後	内湾	貼付 貝殻による割罫 線、石による沈線	日常調理 儀礼食調理	なし	自家消費 交換 輸出
Goodenough	輪積み	口縁部→底部	貝殻ケズリ 叩き板	成形後 施文後	内湾	貝殻による割罫 線、石による沈線	日常調理	なし	自家消費 交換

表1 マッシュムにおける土器づくりの属性

で、イーストケープ・スタイルやワリ・スタイルとは別型式として成立している。

また、詳細な民族誌記録がないためここでは取り上げなかったが、シロシロベイ (Silosilo Bay) 周辺やルイジアード諸島 (Luisiade Archipelago) のパナヤティ島 (Panaati Island)、ブルーカー島 (Brooker Island) でも、土器づくりが記録されている (May & Tuckson 1982: 90-101)。いずれも柳歯状工具による文様が描かれるため、大きくは柳歯文伝統に括られる。しかし、シロシロベイでは屈曲部を持たずに緩やかに立ち上がる器形で、文様帯の区画として刻みを施す微隆起線が巡る (図14)。パナヤティ島 (図15) やブルーカー島 (図16) では、強く内傾する器形や、口縁部が放射状に開く器形などが見られ、恐らく個別の土器型式として認識しうであろう。

いずれにせよ、土器づくり民族誌からは、成形・整形方法の違い、及び工程の違いによって、各地域における土器型式の差異が生まれるものと捉えられる (表1)⁽¹¹⁾。

4. 土器型式の分布・流通に関する考察

上述のように、マッシュムには複数の土器型式の存在を見出すことができ、その成立背景には、製作技法や工程の差異が根底にあると捉えられる。成立した土器型式は、親族組織の広がりをはじめとする多くの要素が複雑に絡み合って分布・流通していく。以下では、筆者が行ったイーストケープ、及びワリ島における土器づくり民族誌調査の成果をもとに、マッシュムにおける土器型式の分布・流通に関わる社会的な要素について見ていく。

4-1. 母系制に基づく血縁集団

マッシムの社会組織は、母系制に基づく血縁集団が基盤となっている⁽¹²⁾。イーストケープでは、一族が所有する土地は、母から長女へ、長女からその娘へと所有権が受け継がれていく（高橋ほか 2010など）。一族の成員は皆、母方の土地に永住する権利を有する。父方の土地や夫方、妻方の土地などにも居住は可能であるが、それは父や配偶者が存命している場合に限られる⁽¹³⁾。死別や離婚の際は、自身が属する母方の土地へ戻ることが原則とされる。埋葬もまた、被葬者が属する母方の土地への帰葬が原則である。一族が所有する土地は、居住域だけではなく畑なども含まれる。家の建築や畑の開墾もまた、母方の土地は自由、それ以外の土地は関係者がいる限り、というのが原則である。つまり、一代限りにおいては双系的なあり方が認められつつも、母系制に基づく社会的原則が居住、土地利用に大きな影響力を持っている。

土器づくりは多くの場合、母から娘へと技術が継承される。娘は、原則として母と同じ土地に居住するため、一族の土器型式は特定の土地で連続と受け継がれることとなる。前述のように、マッシムにおける土器型式は製作技法が其々に異なる。それらの製作技法は、母系制に基づく土地利用のため容易に接触し得ず、各地域で型式が代々受け継がれていくと考えられる。

また、筆者らの調査では、母から娘へ、技術のみならず個々の文様要素の割り付けから描き方、そしてそれらの構成に至るまで忠実に受け継がれている事例を記録している（高橋ほか 2014）。母から娘へという技術の流れは、一つの型式内において、文様や器形的特徴など、より細かな差異を持つ最小単位の細別型式を生み出すと考えられる。

血縁集団が所有する土地の広がりは、集落範囲と重なる。イーストケープにおける集落は、サブクランとほぼ対応するため（高橋ほか 2014）、母系制に基づく血縁集団は、家族やリネージ、サブクランなど、社会組織を構成する最小単位の集団である。土器型式内における細別の最小単位は、このような家族やリネージ、サブクランに起因すると考えられる。

4-2. クランによる協力関係

家族やリネージ、サブクランを括る、より大きな親族組織として、マッシムではクランがあげられる⁽¹⁴⁾。イーストケープにおけるクランは、鳥、蛇、魚、植物の4種類のトーテムを有しており、集落の分岐や土地の分譲の際に大きな影響を持つ（高橋ほか 2014）。一方で、ワリ島には4つのクランが存在するが、トーテムは鳥のみである（高橋ほか 2011）。クランは、開拓や移住の歴史と深く関わっており（高橋ほか 2014）、イーストケープとワリ島では同じ名称のクランが存在するが、その由来が異なるため両者は別の集団と考えられる。つまり、トーテムやクランのあり方は、一見マッシム全域が同質に見えるが、実際は各地域によって様々であり、いくつかのクランが集まることで地域社会的な権まりを形成していると考えられる。

クランの成員同士は、互いに協力関係にあり、婚姻や移住などで各自が属する土地を離れたとしても、その紐帯は維持される。その最たる例が、イーストケープでは「トレハ（toleha）」とよ

ばれる、死者を偲ぶ儀礼である。以下では筆者がこれまで実見したイーストケープの例を紹介する。トレハでは、故人を偲んでクランの成員や関係者が一同に集まり、共食を行う。多くの人が集まるため、大量の食料とそれらを調理するための土器が必要となる。食料や土器は、故人の血縁関係者を中心に同じクランの成員が協力して持ち寄る。土器が足りない場合は、成員の女性が集まって製作することもあるため、トレハは特定クランにより大量の土器が製作される契機の一つとなりうる。その際、他の製作者のつくりかたや、文様などを見聞したり、情報を交換したりすることもあるため、クラン単位で土器型式に関する情報が共有されることとなる。

また、トレハによる協力関係は互恵的なものである。ホストとなる親族は、食料や土器を持ち寄ってくれたクランの成員に対し、持ち寄られた品物を再分配する。土器を持ってきてくれた成員には食料をあげ、食料を持ち寄ってくれた成員には土器をあげることもある。クランの成員は、婚姻や移住を通じて、クランの地縁的な分布範囲を超えて居住していることがあるため、トレハにおける協力関係は、在地において土器がつくれる契機であるとともに、他地域から土器が流入する、あるいは他地域へ土器が流出する契機としても捉えることができる。

集落配置とクランの関係をみると、イーストケープではケヘララとトバでクランの分布に偏りが見られる(高橋ほか 2014)。ケヘララ、トバという区分は、キリスト教の教区による区分であるが、筆者らが行った聞き取りでは、開拓や移住の歴史が異なっており、伝統的にも両地域は其々別の親族集団に由来し、クランの分布には差があったと考えられる。両地域の違いは土器にも表れており、ギルマの器形は、ケヘララでは口縁部が内傾気味に立ち上がり口唇部が丸みを帯びるものが主体を占めるのに対し、トバでは口縁部が直立気味に立ち上がり口唇部が平滑で明瞭に反するものが主体を占める(高橋ほか 2014)。このように、クランの分布の差異と重なる土器の違いは、クランの協力関係により、土器づくりに関する情報が共有されることで生じると考えられる⁽¹³⁾。

セリグマンによる民族誌記録を見ると、ワガワガやトゥバトゥバ島でもイーストケープと同じ4種類のトーテムを持つクランが記録されており、筆者らがイーストケープで記録したものと同一名称のトーテムや組み合わせも散見される(Seligmann 1910)。筆者らの聞き取りによる移住の歴史や、民族誌記録に見る先祖の伝説などを総合的に考慮すると、イーストケープで見られたクランの集合体としての社会組織は、セリグマンが記録したワガワガ辺りまでを包括するものと考えられる。これは、土器づくり民族誌から浮き彫りとなった先述のイーストケープ・スタイルの分布域とほぼ重なる。そのため、いくつかのクランからなる地域社会的な社会組織を基盤として、製作技術や器種組成などの共通点を持った土器型式が成立する一方で、その中にはケヘララとトバで見られたような、各クランによる細別型式が点在していると考えられる。

4-3. 交易による土器の流通

島嶼部であるマッシムでは、島や地域によって環境が異なるため、食料や生活必需品を入手す

るために、他地域との交易が重要な役割を担っている。土器は、調理器具として生活に必要不可欠であり、価値の高い交易品の一つである。そのため、交易を通じた土器の流通もまた、土器型式の広がり深く関わる要素である。近年は、モーターカヌーの発達や儀礼的取引網の衰退により、土器の流通経路や流通範囲は、伝統的なあり方とは大きく様変わりしているが（図17、根岸2008、中門2012a）、ここでは民族誌調査の成果や過去の民族誌記録をもとに、交易による土器流通の様相について探る。

アムフレット諸島やワリ島は、土器が交易品として重要な位置を占めており、それぞれマッシン北部と南部における大規模な土器の生産地となっている。土器は、クラに伴う実用品の交易（副次的交易）や、クラとは別に必要に応じて行われる交易であるギムワリ（gimuwali）の中で流通する。クラには特定のパートナーが存在し、副次的交易もまたクラ取引のパートナー間でやり取りされる（Malinowski 1984 [1922]）。一方で、ギムワリは厳密なパートナーや時期は存在せず、人々の必要に応じて行われる。クラ取引の財宝は、概ね1～2年で1周するとされるため、副次的交易もまた同様の頻度であったと考えられる。アムフレット諸島民は、2～3ヶ月に1度は周辺の島々へ土器を持って行って食料や日用品と交易を行っていたというから（Malinowski 1984 [1922] : 282）、土器の交易はクラよりもむしろ日常的な交易であるギムワリにおいて重要な役割を担っていたことが窺える。ギムワリには特定のパートナーは存在しないが、クラ取引のパート

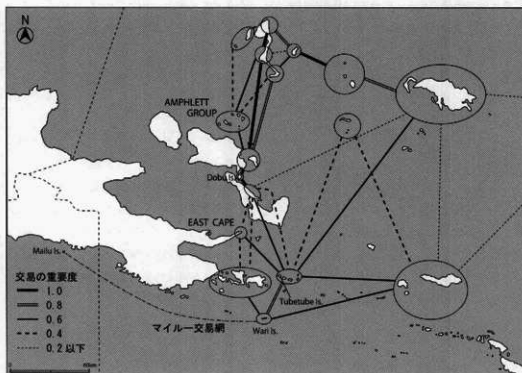


図17 マリノフスキ以後の取引網

ナーシップは、日常的な接触頻度が低い島嶼地域において、交易を巡る争いを避けるための社会秩序としての働きがあったため、ギムワリもまたある程度制限された交易形態であったと考えられる。例えば、ドブ島におけるギムワリの記録では、交易相手は「クラの単位」に属している村の中で、「自分個人のクラの取引相手でない人たちとの間に限る」とされている (Malinowski 1984 [1922]: 362)。つまり、ギムワリにおいても、実質的に土器が流通する範囲は、クラのパートナーを含む近接した地域間に限られると考えられる。アムフレット・スタイルの分布域のうち、グッドイナフ島はクラの輪には組み込まれていないため、取引相手に制限がある交易形態や、土器の一大生産地であるアムフレット諸島が隣接して存在する点を考慮すると、グッドイナフ島の土器は、本地域の流通網から外れており、広範囲に流通させることが困難であったことが理解される。

一方、ワリ・スタイルの分布域であるマッシン南部は、クラの輪の南端に位置してはいるが、マッシン北部ほどクラ交易への依存度は高くなかったようである。マッシン南部におけるクラ交易は、威信材に特化した排他的な交易ではなく、日常的な交易と同一視される傾向が指摘されている (Macintyre 1983: 373)。これは、マッシン北部を構成する島がある程度大きい島々であるのに対し、マッシン南部は小島が点在しているため、日常的な交易がより生活と密着しており、交易の制限が厳しいと生活に影響が出るためと考えられる⁽¹⁶⁾。例えば、トゥベトゥベ島は、主要な産業であるコブラを交易品とするほか、交易の仲介者として立ち回することで生活必需品を入手していた (Macintyre 1982: 34)。前述のように、トゥベトゥベ島でも土器づくりは行われているが、マッシン南部における土器の価値は、大きさによって決まるほか、機能的な価値が重要とされる。そのため、トゥベトゥベ島は交易の中核を担いながらも、自身の土器を強力に流通させることはできず、薄手のワリ島の土器が好まれ広く流通したであろうことは想像に難くない。環境的な背景と、交易体系の違いにより、ワリ・スタイルの分布域は、マッシン北部と比べより広範に及ぶと考えられる。

そのため、交易による土器型式の広がりには、マッシン北部とマッシン南部を貼付文伝統と櫛書文伝統に大きく分けるような、広範な土器型式の広がりとなると考えられる。

4-4. 儀礼食調理と特定器種

ミルンベイ州には、「モナ」と呼ばれる儀礼食調理が存在する。モナは、ヤムイモやバナナ、近年では小麦粉などでつくった団子を、ココナッツミルクで長時間煮たもので、儀礼時の食事には欠かせないものである。煮ている間は、ナデワ (nadewa) と呼ばれる櫛状のヘラで、焦げ付かないようにかき回し続ける (図18)。この作業は男性が行うもので、団子を投入するのは女性の役割である。完成まで2〜3時間煮込み続けるため、調理にあたっては厚手のしっかりした土器が求められる。また、儀礼時の調理であるため、ある程度大型である必要がある。アムフレット諸島では、最も大きい土器であるノクノがモナ調理専用の土器として記録されている (Malinowski



図18 モナ調理（左：イーストケープ、中：アムフレット諸島、右：バナヤティ島）

1984 [1922] : 286)。イーストケープでは、ハバヤがモナ調理専用の土器であり（高橋ほか 2014）、一般的な調理具であるギルマと比べ、大型に分布の偏りが見られる（図19）。バナヤティ島では、「サバイヤ（sabaia）」という器種が儀礼時のスープ状調理用の器種で、「決して一般的な調理では使用しない」と記録されている（Tindale & Bartlett 1937 : 159）。筆者らによる調査では、バナヤティ島でもハバヤが製作されていることを記録している（高橋ほか 2014）。儀礼食調理に特定器種を用いることは、マッシュで広く見られるようであり、グッドイナフ島では、在地の土器は日常用のみ供し、儀礼用の土器はアムフレット諸島産の土器を用いている（Lauer 1974 : 40）。一方で、ワリ島では、モナ調理の存在自体を窺い知ることができなかった。ワリ島の土器は大型であるが、薄手であることが特徴であり、モナ調理には適さない。そのため、ワリ島の土器が搬入される地域においても、モナ調理が存在する限り、在地の特定器種は製作が続けられるか、別地域から搬入されることが想定される。また、ハバヤがイーストケープからバナヤティ島まで、先述の親族組織や交易に基づく土器型式の分布域をまたいで広く分布する点は非常に興味深い。イーストケープとバナヤティ島は、伝統的に直接交易をやり取りする関係にはなく、トゥベトゥベ島などエンジニアリング諸島がその間に入っている。また、バナヤティ島の土器は基本的にブルーカー島など、東方へ向けての交易品であり、エンジニアリング諸島など西方との交易ではカヌーが重要な交易品として位置づけられている（Stuart 1983 : 431）。モナ調理の存在は、一般的な交易の流れとは別次元で、イーストケープとバナヤティ島を結ぶ事象である。つまり、儀礼食調理は、先述の親族組織や交易形態とは全く異なる土器の分布を生み出す背景の一つとして捉えることができ、その広がり是非常に広範囲に及んだり、他の社会的要因によって成立する土器型式を跨いだりするあり方を示すと考えられる。

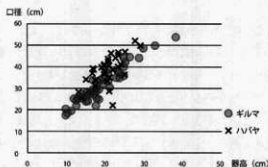


図19 ギルマとハバヤの散布図

5. マッサムにおける土器型式の展開

前節で見てきたように、各地域の土器型式が分布・流通する背景には、家族や親族組織をはじめ、様々な要因が関係していることが窺える。一方で、土器型式の分布域や流通方向は必ずしも一定ではなく、各型式によって様々である。また、イーストケープでは、ワリ島やアムフレット諸島の土器の影響を受けた器種が存在するなど、他地域の土器型式に強い影響を与える事例もある。以下では、マッサムにおける土器型式の展開をめぐる社会的な事象について考察を行う。

5-1. 土器づくりの重要度と土器交易

イーストケープは、マッサム北部とマッサム南部のちょうど中間に位置しており、クラの輪の中で両地域をつなぐ役割を果たしていた。土器に限ってみると、在地の土器がありながらアムフレット諸島、ワリ島双方の土器が流入している。しかし、イーストケープにおける土器づくりは、あくまで家庭的なものである。親族組織の協力関係を通じて部分的に流通することはあっても、交易品としての位置づけではないため、他型式の分布圏に一定量のまとまりを以て輸出されることは無い。

一方で、ワリ島及びアムフレット諸島における土器づくりは、食料や生活必需品を手に入れるための主要な産業である。ワリ島では、「No clay pot, no food」と言われるほど、土器が社会において重要なものとして位置づけられている。ワリ島の土器づくりは、個人の仕事というより、コミュニティ全体の産業として捉えられている（高橋ほか 2015）。土器は、様々なものを入手するための交易品であるため、他地域から土器を搬入することは極めて稀である⁽¹⁷⁾。アムフレット諸島の土器もまた、「食物やカヌーをはじめあらゆるものを手にいれるための生活の糧」であり（福本 1994: 63）、島の重要な産業である。

マッサムには多数の土器づくりが見られるが、土器づくりが社会に占める重要度は地域によって様々であり、その生産体制は決して一様ではない。土器づくりを主要な産業とし、土器交易に依存する島は、結果として大規模な土器の生産地となる。そのような地域では、専ら自分たちの土器を輸出するが、他地域から土器を輸入することは殆どない。一方で、本島や大きな島では、土器づくりを行いつつも他に生業を持つため、土器は自家消費のものが多く、大規模に輸出することは少ない。また、機能や物珍しさから他地域の土器を受け入れることもある。つまり、交易における土器の流れは、双方向的なものではなく、一方的あるいは強弱の差があると捉えられる。

5-2. 土器型式の広がりと模倣土器

交易における土器の流れに強弱がある場合、異なる土器型式が隣接する地域では、双方の様相が混ざり合うのではなく、どちらか一方の様相が他方へ貫入する様相を見ることができる。そのような事例として、マッサムでは模倣土器の存在があげられる。模倣土器は、イーストケープの

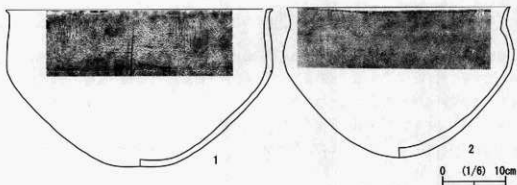


図 20 イーストケープの模倣土器（1：ワリ島の模倣、2：マイルー島の模倣）

ように、在地で土器づくりを行いながらも、他地域から相当数の土器を受け入れる地域で見られる。イーストケープでは、ワリ島やマイルー島の模倣土器が個別の器種として成立している（図 20）。また、イーストケープにおけるグマシラは、アムフレット諸島グマワナ島の土器を真似たものとされる（Negishi 2008）。

模倣土器の出来映えは、製作者の技術や親族関係によって様々である。文様のみを模倣した例や、イーストケープ・スタイルとの折衷的な要素を持つものが見られる一方、優れた製作技術を有する製作者や、ワリ島と縁戚関係を持つ製作者の中には、ワリ・スタイルと遜色ない模倣土器を製作する者もいる（中門 2012b）。

ワリ島の土器は、トゥベトゥベ島の土器づくりにも強い影響を与えている。このような状況は、単純な土器の輸出ではなく、土器に関する様々な情報も周辺地域へ伝わっており、各地の土器型式に影響を与えている。ここでは、このような事象を「土器の発信」と呼称する。

一方で、ワリ島には他地域の模倣土器は存在しない。ワリ島民は、生活のために土器をつくっているものであり、土器を輸出することで必需品を手に入れる。対して、イーストケープは在地で土器を製作するものの、それらは輸出のためではなく、自家消費が主目的である。そのため、儀礼時などを中心に、他地域から土器を受け入れることも多くあり、他地域の土器型式が親族組織の広がりの中でモザイク状に入り交じる様相となる。その中では、他地域からの影響を受けて誕生した模倣土器もまた固有の器種として成立している。つまり、交易における土器の流れは決して双方公的ではなく、在地土器が排他的に分布する土器の発信地域と、土器づくりを行わず、他地域に依存する受容地域、そして在地の土器を主体で持ちながらも、隣接する地域の土器を受け入れ、時には自分たちの型式内に模倣土器として昇華させる地域というあり方が見出せる。

近年では、イーストケープにおいて在地の土器づくりの衰退が著しく、ワリ・スタイルの土器が、半ばブランド化している大型の土器のほか⁽¹⁸⁾、日常調理用の小型～中型の土器も多数受容されている（高橋ほか 2014）。また、グッドイナフ島のように日常調理を在地の土器でまかなう地域では、他地域からの搬入品が儀礼調理用の特定器種に偏る様相が窺える。この状況から、土器

づくりが行われない受容地域では、儀礼用の大型土器は勿論、日常用の中型～小型の土器も多く流通し、在地の土器を持ちながら他地域の土器を受け入れる地域では、儀礼用の大型土器や特別器種などが選択されて受け入れられるという土器型式の分布のあり方が想定される。

5-3. 土器の生産体制と製作技術

筆者らは、ワリ島における調査の中で、一つの土器を製作する過程で複数の製作者が関わる事例を確認している（高橋ほか 2015）。ワリ島の土器は、成形と整形・施文の間に乾燥が挟まれるため、一つの土器に対して複数の製作者が関わるのが可能となる環境にある。ワリ島の鉢形土器は、イーストケープ・スタイルのように器種の別がないが、大きさによる呼称の違いがある。口径や器高の分布を見ると、イーストケープ・スタイルと比べ规格的なまとまりがやや強く（図21）、大型・中型・小型という認識は、ある程度製作者間で共通した認識があると思われる。

アムフレット諸島の土器づくりもまた、成形後に乾燥が挟まれる。筆者らはアムフレット諸島における土器づくりを実現してはいないが、ワリ島と同様、一つの土器が完成する過程で、複数の製作者が関わるのが関わりうる環境ではある。

一方で、イーストケープの場合は成形から整形・施文が間断なく行われるため、土器づくりの過程で複数の製作者が関わることは無く、土器は個人の作品として製作される。

このような事例から、土器づくりに特化した地域では、土器は島民全体にとって重要な交易品であるため、コミュニティ全体の産物として認識されると考えられる。また、製作過程で乾燥を挟むという特徴も、単なる技術や工程の差異ではなく、交易用に沢山の土器を効率よく製作する戦略の一つとも捉えうる。ワリ島やアムフレット諸島の土器の売りである、特に大型の土器もま

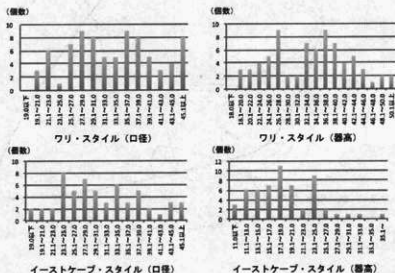


図21 ワリ・スタイル (上) とイーストケープ・スタイル (下) の度数分布

た、乾燥を挟むことにより、器形の立ち上げや器壁の薄手化が可能になると思われる。土器づくりにおける成形・整形法など技術の差異は、器形や口縁部形態など、直接的な土器の要素に反映されるが、乾燥を挟むか否かという製作工程の差異は、各地域における土器の生産戦略とも結びつく重要な点と考えられる。

6. まとめ

本稿では、土器づくり民族誌の検討から、土器型式の成立やその地域性が生まれる背景に、いくつかの要因が考えられることを明らかにした。マッサムにおける土器型式の成立・分布の背景には、血縁集団、クランを基盤とした親族組織、儀礼における親族組織の協力関係、製作技法、交易、特別な儀礼食調理の存在など、様々な要素を窺うことができる。それらはいずれも同心円状の広がりではなく、別のものと重なったり、飛び越えたり、縦断したりと複雑な広がり方を見せる（図22）。

土器型式に係る社会的背景の最小単位は、土器づくりの技術継承に関わる血縁関係である。母から娘へと受け継がれる技術は、母系制における土地利用や居住制度とも絡み、特定の土器づくり技術が特定の範囲内に広がる基礎となる。

本稿で提示したイーストケープ・スタイルなどの土器型式は、クランに基づく親族組織や、幾

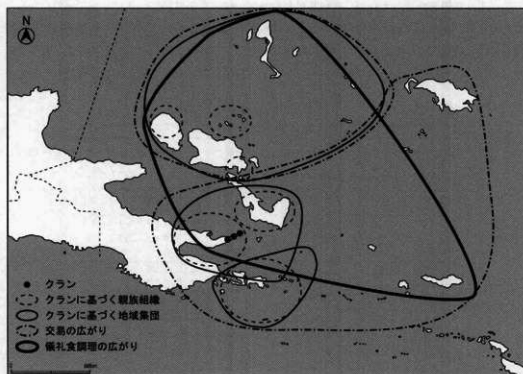


図22 マッサムにおける土器型式と社会的背景

つかのクランによって構成される地域社会的な集団の広がり深く関わるものである。親族組織の協力関係によって、土器に関する情報の共有が行われるほか、集団内で土器が流通する。結果として、クランを単位とした細別型式が点在する一方で、製作技術や器種組成の点では、クランの纏まりによって構成される地域内で斉一的な様相を示す。この土器の広がり、一つの型式として捉えうる共通した特徴を有しており、考古学的に捉えうる土器型式に近いと思われる。

親族組織の広がりを通じて成立した土器型式は、交易によって隣接地域と接触する。しかし、交易を通じた土器の流通は、決して双方向的なあり方ではなく、各地における土器づくりの重要度により、土器の発信地域や受容地域の別がある。また、土器の受容地域でも、在地の土器を持つ地域と持たない地域では、受容する器種に差が生じると考えられる。土器型式の分布において、型式圏の境界となる地域では両型式の様相が同程度に混じり合うと単純に考えがちであるが、その境界を挟む両地域の土器を詳細に分析することが土器型式の流通の方向や、各地における土器の流通戦略を見出す上で重要と言える。儀礼食調理における特別器種の存在は、儀礼と土器の分布という視点のみならず、土器の流通の流れを探る上でも鍵となる資料と考えられる。

また、土器の発信地域は、土器づくりに特化した地域であることが多く、土器づくりは当該社会の中で非常に重要な産業として位置づけられている。そのような地域の製作工程に注目すると、乾燥を挟むことで、一つの土器が出来上がるまでに、複数の製作者が関わる可能性がある。土器製作技術は、基本的には母から娘へと受け継がれ、土器型式成立の基盤となる要素であるが、地域社会における土器の重要度や、他地域への流通戦略を探る上では、製作工程にまで目を向け、社会の中で土器づくりがどのように位置づけられているかを把握する必要があるであろう。

おわりに

本稿では、土器型式の成立や地域性の背景には、多様な社会的要因が絡み合っており、土器型式は単純に地理的なまとまりを示す単位では無いことが土器づくり民族誌から理解されることを示した。無論、この土器型式のあり方が、すべての縄文土器型式に当てはまると言うつもりは毛頭ない。このモデルケースを縄文土器研究に還元するためには、まず対象とする縄文土器型式そのものを詳細に検討する必要があることは言うまでもない。しかし、親族組織による型式差、交易による型式の広がり方、儀礼と土器の関わりなど、幾つかの社会的な枠組みから生じる土器型式のあり方を示すことができたことは、考古遺物から、その背景にある社会的な事象を読み解くための視点として注意すべきであろう。

本稿が、土器型式の研究からその背景にある人や社会を読み解くための一助となれば幸いである。

謝辞

本稿は、筆者が2006年から継続してフィールドワークを行ってきた、パプアニューギニア・ミルンバイ州における土器づくり民族誌研究の成果の一部をまとめたものである。十分な検証も行わないまま、次から次へとわき上がる興味関心に手を広げたため、非常にまとまりのない内容となってしまった感は否めない。しかし、土器づくり民族誌研究が、土器型式研究を行う上で多くの示唆を与えてくれるものであるということは例示できたかと思う。

筆者をニューギニア調査に加えていただき、これまで多くのご指導をいただいていた高橋龍三郎先生（早稲田大学文学術院教授）に感謝申し上げます。また、本稿を記すにあたり、以下の方々から多くのご教示を賜りました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

井出浩正、大網信良、後藤明、根岸洋、平原信崇（50音順、敬称略）

なお、本稿で紹介したイーストケープ及びワリ島における民族誌調査の成果は、早稲田大学の調査隊（代表：高橋龍三郎）による調査成果の一部である。また、本稿は日本学術振興会平成24～25年度科学研究費補助金（（若手（B）：「土器の型式変化と分布に関する民族考古学的研究」））による研究成果の一部である。

註

- (1) 「マッシム」という呼称は、ハミーにより提唱されたものとされるが、元はミシマ島に関する不十分な認識から生じたものである。しかし、ハドンはこの地域の研究をさらに深め、渦巻文や連続する入組文、グンカンドリをモチーフとした文様など、特徴的な美術様式が広がるニューギニア本島南東部、ルイジアード諸島、デントロカスト諸島、トロブリアンド諸島、ウッドラーク諸島を総称して、「マッシム」と呼んだ（Haddon 1894：184-185）。これは、今日的な行政区分と重なる部分が多いが、美術様式という文化的な側面から本地域を括った呼称であるため、本稿でも「マッシム」の呼称を用いる。
- (2) 頭骨が集められた洞窟はスカルクエブ（skull cave）と呼ばれ、現在では観光地の一つとなっている。
- (3) 土器づくりを実見した際、ギルマをつくるのに失敗した女性に対し、別の製作者の女性は「ハバヤにしたらいいんじゃないか？」という助言をしたという（井出浩正氏、根岸洋氏のご教示による）。
- (4) 一時期、周辺の島々も含め、コブラ製作のためのプランテーションが展開したこともあったが（Belshaw 1955）、儲けが少なくなったため2000年代には廃れてしまった（Faole 2005）。近年ワリ島では、ナマコ漁による現金収入が大きな産業の一つとなっており、小島でありながら人口は1000人、人口密度は1kmあたり400人を超える。一方で、現金収入はコミュニティ全体に還元される率が高く、教育普及率は極めて高い（Faole 2005）。
- (5) 大型の土器であれば、成形途中でさらに1～2回乾燥を挟むことがあるという。2度目の乾燥は、天候や大きさによっては1日～数日行われることもある。
- (6) ワリ島における底部整形から焼成の過程については、筆者らは実見しておらず、聞き取りおよび民族誌記録（May & Tuckson 1982）による。
- (7) カオカオは、メイとタクソンが調査を行った時点で既に製作されなくなっていた（May & Tuckson

- 1982:76)。また、ラウアーの記録に「植民地支配以前は～」との記述があることから、20世紀前半には既に廃れた器種である可能性が窺える (Lauer 1974:139)。
- (8) ラウアーの調査時には「ノシボマ」と「アイデアヤ」も日常調理に用いられることがあったとの記録がある (Lauer 1974:139)。
- (9) 粘土の違いが土器づくりに及ぼす影響について、イーストケープではワリ島の土器づくり技術を持つ製作者が、「粘土が違うためイーストケープでワリ島の土器は作れない」と言っていた。また、金子守恵氏はエチオピアの土器づくり民族誌の中で、結婚に伴い夫方へ移住した女性が、後の地の粘土に慣れず土器が壊れるという事例を記録している (金子 2011:142-150)。ただし、小型の土器であれば壊れることが殆どないことも記録されている (金子 2011:148)。イーストケープに於けるワリ島の多数土器もまた、小型～中型のものに限られており、粘土の違いは土器づくりに大きな影響を持つと考えられる。
- (10) 根岸洋氏のご教示による。
- (11) 根岸洋氏は、イーストケープ・スタイルとワリ・スタイル間の型式差として、「粘土・粘土素地の調整法 (粘土扱い) が規定的要素として、粘土紐の接合法が副次的要素として機能していた」ことを指摘している (根岸 2010:276)。
- (12) 唯一、クラ交易におけるパートナーシップは父から息子へと父兄の流れをたどる (Scoditti & Leach 1983:272)。しかし、それ以外は、チーフの座など男性が役割を担う地位であっても、母方の系譜を次ぐ最年長の男子が受け継いでいく (高橋ほか 2008)。
- (13) イーストケープにおいては、土地所有者の許可があれば、父親の死後も父方の土地に住む「ナトゥレヤ (natuleya)」や、自身の系譜にない土地に住み続ける「テレゲレタナ (telegetana)」という制度が例外的に認められる場合がある (高橋ほか 2010)。
- (14) イーストケープでは、サブクランとクランの間に、由来を同じくする「オリジナルファミリー」の存在を確認している (高橋ほか 2014, 2015)。しかし、それらの集団が土器型式の流通と分布にどのような影響を持つかについては、まだ検討が必要であり、本稿ではその存在を示すにとどめる。
- (15) グッドイナフ島においても、集落ごとの細かな土器の差異が記録されている (Lauer 1974)。例えば、低地ワタルマ内のブドゥナ (Buduna) やキクワナウタ (Kikwanauta) の製作者は、輪積みの単位をあまり気にしないが、これは粘土の可塑性が他の地域と比べ低いことに由来する。また、ブドゥナの製作者は成形時の器形調整をあまり行わないため、器形の湾曲度合いが比較的弱い。一方、ヤウヤウラの製作者は、成形の最終段階で、粘土を掻き上げず、粘土の栓をすることで底部を塞ぐ。デザインもまた、地域によって異なるという。そのため、粘土や器形、文様などで、グッドイナフ島の土器はより細かく分類することができると考えられる。
- (16) 宮本常一は、交易中心の村のあり方として「一見すると、同じように見えるけれども、村の中に入ると、それぞれ生活のたて方がちがっている」ことを指摘している (宮本 2012:33)。マッシン南部は、ワリ島が土器、トゥベツベ島はコブラ及び交易の仲介、パナヤティ島はカヌーなど、島ごとの特産品や役割が顕著であり、各島や地域を一つの村として捉えたと、交易中心のあり方であることが窺える。
- (17) 筆者らのワリ島における調査では、島内ではワリ島の土器以外にはブルーカー島の土器を数点見かけたのみであった。
- (18) 本地域における土器の価値は、大きさによって決まる。大型の土器は土器の価値としてはもとより、盛大な儀礼を行うことができる者としてのステータスともなっている (Macintyre 1982:46)。

引用文献

Belshaw, C. S. 1955 *In Search of Wealth, A Study of the Emergence of Commercial Operations in the*

- Melanesian Society of Southeastern Papua*. American Anthropological Association Vol. 57, No. 1, Part 2
- Foale, S. 2005 *Sharks, sea slugs and skirmishes: managing marine and agricultural resources on small, overpopulated island in Milne Bay, PNG*. RMAP Program, Research School of Pacific and Asian Studies, ANU
- Haddon, A. C. 1894 *The Decorative Art of British New Guinea: A Study in Papuan Ethnography*. The Academy House
- Irwin, G. J. 1983 Chieftainship, kula and trade in Massim prehistory. *The Kula: New Perspectives of Massim Exchange*. Cambridge University Press. pp29-72
- Lauer, P. 1970 Amphlett Islands' Pottery Trade and the Kula. *Mankind*, Vol.7, No.3, pp165-176
- Lauer, P. 1973 Miadeba Pottery. *Records of the Papua New Guinea Museum*, No. 3. pp63-77
- Lauer, P. 1974 Pottery Traditions in the D'Entrecasteaux Islands of Papua, *Occasional Papers in Anthropology* Number 3.
- Macintyre, M. 1982 Pottery Manufacture on Tubetube. *Canberra Anthropology*. Vol. 5, Issue 2. pp34-57
- Macintyre, M. 1983 Kune on Tubetube and in the Bwanabwana region of the southern Massim. *The Kula: New Perspectives of Massim Exchange*. Cambridge University Press. pp369-379
- Malinowski, B. 1984 [1922] *Argonauts of Western Pacific*. (reissued) Waveland Press, Inc.
- May, P. & M. Tuckson 1982 *The Traditional Pottery of Papua New Guinea*. University of Hawaii Press
- Negishi, Y. 2008 Comb and Applique: Typological Studies of Two Ceramic Traditions during the Last Thousand Years in the Eastern Papua New Guinea. *Bulletin of the Department of Archaeology, the University of Tokyo*, No. 22. pp119-161
- Scoditti, G. M. G. & Leach, J. W. 1983 Kula on Kitava. *The Kula: New Perspectives of Massim Exchange*. Cambridge University Press, pp249-273
- Seligmann, C.G. 1910 *The Melanesians of British New Guinea*. Cambridge University Press
- Stuart Berde. 1983 The impact of colonialism on the economy of Panaeati. *The Kula: New Perspectives of Massim Exchange*. Cambridge University Press. pp431-443
- Tindale, N. B. & H. K. Bartlett 1937 Notes on Some Clay Pots from Panaeati Island, South-east of New Guinea. *Transactions and Proceedings of the Royal Society of South Australia*, Vol. LXI, pp159-162
- 金子守恵 2011 「土器づくりの民族誌 エチオピア女性職人の地縁技術」昭和堂
- 後藤 明 2002 「クラ交換の舞台裏」『物質文化』73, 物質文化研究会, 1-16頁
- 後藤 明 2007 「本書の編集にあたって」『土器の民族考古学』同成社, 3-11頁
- 高橋龍三郎, 細谷葵, 井出浩正, 根岸洋, 中門亮太 2008 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (4)」『史観』第158冊, 早稲田大学史学会, 74-99頁
- 高橋龍三郎, 井出浩正, 根岸洋, 中門亮太, 根兵皇平 2009 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (5)」『史観』第160冊, 早稲田大学史学会, 72-89頁
- 高橋龍三郎, 井出浩正, 中門亮太 2010 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (6)」『史観』第162冊, 早稲田大学史学会, 79-100頁
- 高橋龍三郎, 中門亮太 2011 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (7)」『史観』第164冊,

早稲田大学史学会, 104-116頁

高橋龍三郎, 中門亮太, 平原信崇, 岩井聖吾, 服部智至 2012 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (8)」『史観』第166冊, 早稲田大学史学会, 83-99頁

高橋龍三郎, 中門亮太, 平原信崇 2014 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (10)」『史観』第170冊, 早稲田大学史学会, 98-121頁

高橋龍三郎, 中門亮太, 平原信崇 2015 「バブアニューギニアにおける民族考古学的調査概報 (11)」『史観』第172冊, 早稲田大学史学会, 82-103頁

中門亮太 2012a 「Malinowski 以後の土器交易網」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第13号, 早稲田大学會津八一記念博物館, 39-50頁

中門亮太 2012b 「イーストケープ地方の土器生産と交易」『三大学公開シンポジウム バブアニューギニア民族誌から探る縄文社会 発表要旨集』早稲田大学考古学研究室, 29-34頁

西田泰民 2008 「情報としての縄文土器」『縄文時代の考古学7 土器を読み取る—縄文土器の情報—』同成社, 3-15頁

根岸 洋 2007 「土器作り民族誌と考古学—ラビタ以後のニューギニア, マッシュムの土器文化—」『物質文化』84, 物質文化研究会, 1-22頁

根岸 洋 2008 「“流行”の移り変わり—クラ交易網における土器生産地の転換—」『日本考古学協会2008年度大会』日本考古学協会, 455-456頁

根岸 洋 2010 「接合法から考える土器技術論—バブア・ニューギニア東部の土器作り民族誌から—」『南海を巡る考古学』同成社, 253-280頁

福本繁樹 1994 「精霊と土と炎—南太平洋の土器—」東京美術

宮本常一 2012 「生きていく民俗 生業の推移」河出書房新社

図版出典

図1・2: 筆者作成

図3: 早稲田大学調査隊収集資料

図4: 早稲田大学調査隊撮影 (2006・2007年)

図5-1・2・4: 早稲田大学調査隊収集資料, 3・5: 筆者作成

図6: 早稲田大学調査隊撮影 (2013年)

図7-1~5・7: (根岸 2007) より転載, 6: 早稲田大学調査隊収集資料

図8: (May & Tuckson 1982) より転載

図9: (May & Tuckson 1982) より転載

図10: (Lauer 1974) より転載

図11: 筆者作成

図12: (Lauer 1974) より転載

図13: (May & Tuckson 1982) より転載

図14: (May & Tuckson 1982) より転載

図15: 早稲田大学調査隊収集資料

図16: 早稲田大学調査隊収集資料

図17: (Irwin 1983) を改変

図18左: 早稲田大学調査隊撮影 (2012年), 中: (福本 1994) より転載, 右: (May & Tuckson 1982) より転載

土器づくり民族誌から見た土器型式の社会的背景（中門亮太）

図19：早稲田大学調査隊収集データをもとに筆者作成

図20：早稲田大学調査隊収集資料

図21：早稲田大学調査隊収集データをもとに筆者作成

図22：筆者作成

（青森県教育庁文化財保護課 青森県青森市蟹沢1丁目7-4）